



明るい場所から暗い場所へ行くと、何も見えなくなるのはなぜ

目の中に入る光の量を調節するひとみ

わたしたちの目は、明るい物を見るときにはひとみを小さくし、暗い物を見るときにはひとみを大きくして、目の中に入る光の量を調節しています。

明るい場所から暗い場所へ行くと、明るさがひどくちがう場合には、ひとみがすぐ大きくなっても、この調節がまにあわず、何も見えなくなってしまうのです。

時間がたてば、見えるようになる

物が見えるは、目の中へ入ってきた光が、目（眼球）のおくにある網膜にあたり、網膜の光を感じる細胞（感覚細胞）が、これを神経に伝え、神経がそれを脳に伝えて、物が見えたと感じるのです。

網膜の光を感じる細胞は、明るい（光の強い）場所にいるときには、明るい場所になれて、強い光に感じるようになっていきます。そのため、暗い（光の弱い）場所へ行くと、網膜の光を感じる細胞が、弱い光では、感じなくなっているため、何も見えなくなるのです。明るい場所から暗い場所へ行くと、何も見えなくなるのは、そのためです。

しかし、時間がたてば、網膜の光を感じる細胞が、弱い光でも感じるようになり、見えるようになるのです。（監修・保志 宏）

